

Romeo and Julietの修辞法の研究

A Study on the Rhetoric of *Romeo and Juliet*

西田 義和

NISHIDA, Yoshikazu

I

各国の公用語と言われている国語にも様々なレトリック (rhetoric) が存在するが、特に、現代英語では地理的にも使用域が広範囲にわたっているのが、表現の主体、対象、目的、媒体等の多様性によって、多くの種類のレトリックが存在するようになってきた。この小論で論ずる様々な表現技法も、その妥当性は相対的であって、あるレトリックの箇所においては妥当であったり妥当でなかったりするにすぎない。それ故にレトリックの論議をする場合には、対象になっているレトリックの種類と目的はいつも一つであるということ認識することである。

このような立場から、我々がシェイクスピアの初期から最後期までの作品を見てゆくと、彼の言語は古風で、レトリックがしっかりしていて、イメージ、言葉遊び、英知のこもった格言に満ちて、理解するには骨が折れることである。しかし我々がこれらを学ぶことに努力することは素晴らしいことである。それはそれらを研究すると同様に、特に、英語に対する興味と関心を増してくれるものである。シェイクスピア時代の英国の作家たちが、新しい表現の手段と効果を求めて、学び、応用

した修辞法の多くの技巧が、今もなお、現代英語の中に生きているのを知ることが興味深いことである。

今回は『ロミオとジュリエット』 (*Romeo and Juliet*) に的を絞って、そこに出ている様々な修辞法を考えてみたい。

II

1. 倒置反復 (Antimetabole)

前の語句と同じ語句または思想を、順序を逆にAB, BAの如くして反復する修辞法のことである。

Rom. Why, then is my pump well flowered.
Mer. Well said: follow me this jest now till
thou hast worn out thy pump, that when
the single sole
of it is worn, the jest may remain,
after the wearing, sole-singular.
Rom. O single-soled jest, solely singular for
the singleness!
Mer. Come between us, good Benvolio; my
wits faint. (2.4.64-71)

ロミ。それじゃおれの舞踏靴だって並ぶ者が
ないよ、花のように
孔があいてるからね。

キーワード：修辞法、言語、文体
Key words : rhetoric, language, style

マー。こいつは旨い。じゃ貴様の舞踏靴が
擦り切れるまで、

その洒落を追掛けてくれ、そうすれば靴の
一枚底が擦り切れても、
洒落は残るだろう、一枚看板のその洒落だ
けは。

ロミ。全く一枚看板の、どうせ底の知れた
洒落だ！

マー。おい、ベンヴォーリオ、加勢に来て
くれ、おれの知恵が
ふうふういつている。

シェイクスピアは種本であるといわれて
いるアーサー・ブルックの長詩『ロミュス
とジュリエットの悲劇』（Arthur Brooke: *The
Tragedy of Romeus and Juliet*, 1562）が
ピューリタンのモラルを主題として、「不正な
欲情に身を投げ、両親の威信、友人の忠告を
無視する」若者への警告を目的としていたの
にたいし、愛を主題として、愛を謳いあげて
いる。従って、ロミオもジュリエットも、恋
するもの（lovers）の姿を最も純粋な形で具
現している。もちろんロミオとジュリエット
の二人も愛に生き、愛に死ぬ過程で、様々な
側面を見せていく。ここではロミオがジュリ
エットとのひそかな結婚をロレンス神父に頼
んでからすぐのことであった。彼は浮き浮き
とはずむ心に駈られてなのか、特にこの箇
所は倒置反復等を用いながらロミオとマー
キューシオとの機知合戦でもある。あえて紹
介するほどのことではないが、マーキューシ
オの箇所は“single sole,.. sole singular”を用
い、これに対してロミオの方は“single-soled,
... solely singular,... singleness”を用いること
によって、この二人が駈洒落合戦を展開して
ウィットに富むところを見せたりして非常に

面白い箇所である。

2. 要語省略 (Brachylogia)

構文上必要な語句を省略することで、連語
省略とも呼ばれ場合もある。

これは文のテンポをはやめ、また調子を高
めるのに役立つと同時に、文にバランスの感
じを与えるものである。

Par. Beguiled, divorced, wronged, spited,
slain!

Most detestable death, by thee beguiled,
By cruel cruel thee quite overthrown!

O love! O life not life, but love in death!

Cap. Despised, distressed, hated, martyr'd,
kill'd! (4.5.55-59)

パリ。欺かされて、縁を切られて、辱めら
れて、いじめられて、
殺されてしまったんだ！

最も忌わしい死神、お前に欺かされたんだ、
残酷無慈悲な貴様に、すっかりやられてし
まったのだ！

ああ、いとしい人！ああ、わが命！命じゃ
ない、死んだ恋人！

キャ。さげすまれ、苦しまれ、憎まれ、犠
牲にされて、殺されたのだ！

ここでは引用している最初の55行目の文
と、最後の59行目の文にこの要語省略を用い
ることによって、ジュリエットが亡くなった
のを発見したときのパリス伯とキャピュレッ
トの悲しみが非常に効果的に表現されている。

3. 換喩 (Metonymy)

ある事物をあらわす時に、その性質や、ま
たそれに密接な関係のあるものを使ってこれ

を表現する方法。

Could not take truce with the unruly spleen
Of Tybalt deaf to peace, but that he tilts
With piercing, steel at bold Mercutio's
breast, (3.1.162-164)

(喧嘩をしようとかかっているティボルト
のがむしゃらな怒りは
とうてい宥めるわけにはいかないで、ティ
ボルトは大胆な
マーキューシオの胸をねらって鋭い剣を突
き出すと、)

ギリシャ語に由来して、<指示対象>の名称を属性の名称で、あるいは意味の上で何らかの関連を持つ実体の名称で（例えば、原因と結果、道具、源泉など）、置き換える<修辭的文彩>あるいは<内容的文彩>を指す。従って、<記号論的>な言い方をすれば、この<換喩>は、<指標的記号>である。すなわち、代わりに用いる語とその指示対象との間には、多くの点で関係があるのである。

つまり“tilts”は“thrusts”の意味である。

4. 冗語法 (Pleonasm)

必要以上の言葉を使つての表現で、しばしば強意のために用いられたりする。

I saw the wound, I saw it with mine eyes,
God save the mark!—here on his manly
breast: (3.2.52-53)

(私は傷を見ました、この目で傷を見たのです、——
まあ恐ろしい！あの男らしい胸のここの処
に。)

ここでは特にはるか昔の過去を回想し

ている箇所では、“saw....with mine eyes”が Pleonasmである。

5. 同語源語反復 (Polyptoton) と倒置反復 (Antimetabole) の組み合わせ

Polyptotonはどちらかというと比較的その使用が容易であったので、シェイクスピア時代の作家たちは、機智の腕試しに次のような同語源語反復と倒置反復を組み合わせて駆使して非常に面白い場面である。なお英文の引用の箇所は冒頭の箇所と偶然にも同じであるので、英文の引用のみにとどめる。

Rom. Why, then is my pump well flowered.

Mer. Well said: follow me this jest now till
thou hast worn out thy pump, that the
single sole

of it is worn, the jest may remain,
after the wearing, sole-singular.

Rom. O single-soled jest, soley singular for
the singleness!

Mer. Come between us, good Benvolio; my
wits faints. (2.4.64-71)

ここでこの“jest”を用いることによって、倒置反復で用いられている語にさらに劇的効果を与えているのである。この2つの組み合わせを行なうことによるロミオとマーキューシオの機知合戦に拍車がかかるのである。

6. 撞着語法 (Oxymoron)

互いに正反対または相容れない意味を持つ2つの語句を結びつけることによって一見矛盾した観念を一つにまとめる技法のことで、別名矛盾語法と言う人もいる。この使い方をシェイクスピアはこの作品において非常に多

く用いているが、用例は数例にとどめたい。

(1) Should, without eyes, see pathways to his will!

Where shall we dine? O me! What fray was here?

Yet tell me not, for I have heard it all.

Here's much to do with hate, but more with love.

Why, then, O brawling love! O loving hate!

O any thing, of nothing first create!

O heavy lightness! serious vanity!

Mis-shapen chaos of well-seeming forms!

Feather of lead, bright smoke, cold fire, sick health!

Still-waking sleep, that is not what it is!

This love feel I, that feel no love in this.

Dost thou not laugh? (1.1.178-188)

（目がなくても思うところへ近寄れるとは！

どこで食事をしようか。おやおや！大した喧嘩があったな？

だが話してもらわなくていい、ちゃんと聞いている。憎みからの

事件も大変だが、愛からはなおそれ以上だ。してみると、ああ

喧嘩しながらの恋！ああ恋しながらの憎み！

ああ嘘からで出た真！

ああ沈みながらの浮気！真剣の戯れ！

美しい姿の醜い取り乱し！

鉛の羽根に、輝く煙、燃えない火に、丈夫でいながらの病気！

いつも覚めている、眠りでない眠り！

だと思いながらにするこの恋

おかしいだろう？)

(2) Did ever dragon keep so fair a cave?

Beautiful tyrant! fiend angelical!

Dove-feather'd raven! wolvis-ravens lamb!

Despised substance of divinest show!

Just opposite to what thou justly seem'st,

A damned saint, an honourable villain!

O nature, what hadst thou to do in hell,

When thou didst bower the spirit of a fiend

In mortal paradise of such sweet flesh?

(3.2.73-81)

（あんな美しい洞窟に棲む悪龍がおったかしら。

美しい暴君！天使のような悪魔！

鳩の羽根を付けた鴉！狼のように貧慾な小羊！

穢わしい中味を隠す神々しい見せかけ！

ちょうどその顔つきとそっくり正反対で、

呪わしい聖者、尊敬すべき悪党！

ああ自然よ、お前は地獄へ行ってさぞ困ったことだろう。

悪魔の魂をあんな立派な人間の

美しい肉体に包んだからは？)

まず上記の(1)の例文はシェイクスピアのこの用法の中ではあまりにも知られた箇所とあってよいかも。また、その表現の考え方もほぼ一致しているようである。つまり、「ロミオは同時代の恋愛詩の月並みを対照表現で語っているのであって、彼の情熱に人工的な感じを与える」とT.J.B. Spencerは彼の著書の中で述べている。このような意味において、対照表現をうまく使用することにおいて、表現の効果を強めるのに重要な役割を果たしている。

(2)ではロミオが撞着語法を反復すれば、ジュリエットも彼に負けなくらいに撞着語法で応戦している。ジュリエットはロミオが従兄弟のティボルトを殺したことを聞き、このときロミオの友人のベンヴォーリオの『逃げる』という必死の叫びも、ジュリエットの耳には届かなかったようだ。(というより無視したのかもしれない。)そして彼女は乳母とのやりとりのなかで、「まあ、ロミオの手がティボルトの血を」と述べ、さらにロミオの外面と内面の矛盾を呪い、(2)に示したように撞着用法の使用が続く。

O serpent heart, hid with a flowering
face!

Did ever dragon keep so fair a cave?
(ああおもてに花を装う毒蛇の心!
あんな美しい洞窟に棲む悪龍がいたかしら?…)

このようにロミオの神さながらの「外面show」と卑劣な「実体substance」の真反対な齟齬と矛盾をジュリエットは激情に溢れて怒号している。しかし彼女の怒りは呼んでくださる人にはよく伝わるであろう。

7. 二詞一意 (Hendiadys)

二つの語が、形式上は対等であるが、意味上では主と従の関係にあるような技巧のことである。また別の呼び名を重言法ともいう。

形式も「名詞+and+名詞」=「形容詞+名詞」の例だけでなく、「形容詞+and+形容詞」が「副詞+形容詞」となるようなこともある。また同じ関係は“and”を省いて、複合語の形にした例もある。

- (1) Her vestal livery is but sick and green
And none but fools do wear it; cast it off.
(2.2.8-9)

(月の与える処女の制服は病的な緑色で、阿呆のほかに着るものはない。脱いでしまうがいい。)

- (2) And with a silk thread plucks it back again,
So loving-jealous of his liberty. (2.2.181-182)

上記(1)のsick and greenがこの用法で、sickly greenの意味であり、病気と若さと月の青白い光を暗示する。(2)ではloving-jealousがaffectionately jealousの意味である。

8. 駄洒落 (Pun)

同一の語を異なった意味に用いたり、また同音異義の二語以上を利用してユーモラスな効果を出す表現法のことである。

- (1) This torture should be roar'd in dismal hell.
Hath Romeo slain himself? say thou but 'I,'
And that bare vowel 'I' shall poison more
Than the death-darting eye of cockatrice:
I am not I, if there be such an I;
Or those eyes shut, that make thee answer 'I.'
If he be slain, say 'I'; or if not, no:
Brief sounds determine of my weal or woe.
(3.2.44-51)

(そんな苦しめの言葉は、陰気な地獄で怒鳴るがいい。)

ロミオが自殺をなされたのかね? お前が「ハイ」と答えただけで、そのたった一声は、一目で殺すあの毒蛇の目よりも恐ろしい目を見させる。

もしそんなアイがあれば、私は私ではない。

あるいは君にアイと答えさせた人の目は閉じている。

もしあの人を殺されないのなら、「ハイ」というがいい。

でなければ「イイエ」といいなさい。

私の幸不幸は短い音できまるのだ。）

(2) We see the ground whereon these woes do lie;

But the true ground of all these piteous woes
We cannot without circumstance descry.
(5.3.179-181)

(こういう不幸な人々の倒れているのはどこだとわかって、すべてこうした痛ましい不幸の本当の原因がどこだということは、詳細に調べなくては発見することができない。)

上記(1)はロミオが訪ねるのを待ち焦がれているところに、ロミオが亡くなったと乳母から知らされて箇所であるが、ここに ‘eye’、‘aye’、‘I’ 三つの意味を掛けた一語二義法(兼用語法)がある。すなわち、45行目の ‘I’ は ‘aye’ と同意である。当時は ‘aye’ を ‘I’ とつづつてもいた。“death-darting eye of cockatrice” の ‘cockatrice’ は一種の怪蛇で、それに一瞥を投げかけても死ぬと言う。‘I’ と ‘eye’ はしゃれ。“I am not I, if there be such an I” 「もしそんなI (“I” は ‘aye’、‘eye’ のしゃれ) あれば私は私ではない。(どうかなってしまう。)」ということである。“Or those eyes shut, that make thee answer ‘I’ 「あるいは君にアイと答えさせた人の目は閉じている(物が見えない)」“Or” は前行の “I am not I, if there be such an I” に対するもの

である。“those eyes” はロミオの目であり、“shut” の前にbe動詞の ‘are’ が省略されている。

(2)では“ground”と“woes”の二語を繰り返している。“ground”は明らかな同語異義法であるが、“woes”は形容詞の修飾の方法等、むしろ意図的に拙劣なりかねない。つまり179行目の “these woes” =these unhappy being. 180行目の “true ground” =real cause. 前行の “ground” (地面) とのしゃれ。

現代英語ではPunというものが、これまで紹介してきたように用いられることはほとんどないが、我々はPlay on wordsが表現を豊かにしたり、効果的にしたりを知ることができる。

9. くびき語法 (Zeugma)

一つの動詞または形容詞を、同一の文中で異種の二つ以上の名詞に関して用いることで、文法的にはその中の一語のみに適用され、他は意味を補って解釈する。例えばHer hair is red, her eyes blue. (彼女の髪は赤毛で、眼は青い) —この文は意味は通じるが、her eyes is blueと書いているに等しいので、文法的には整わない。このようにふたつの語法上相容れない語句をひとつの語で無理に結びつけた表現をくびき語法と言う。(池田拓郎著、英語文体論より)

Chorus. But passion lends them power, time means, to meet, to meet,

Tempering extremities with extreme sweet. (II Prologue 13-14)

(情熱はロミオとジュリエットの二人に力を、時間は手段を与えて会合を助け、極度の苦しみを柔ぐるに極度の喜びをもってする。)

10. 反復 (repetition)

本来、英語は日本語と違って代名詞や類義語句等を利用して同じ言葉を避けることが多い。しかし、シェイクスピアはこの作品だけでなく、他の作品にもこの反復を非常に多く使用している。

反復の最大の目的は強調である。それは意味を統一し、拡大し、確認し、リズムを生じさせる効果を持ち、真剣さにも、こっけいさにも、そして皮肉さにも用いる。

(1) O Romeo, Romeo! wherefore art thou Romeo? (2.2.33)

(ああロミオさん、ロミオさん！なぜあなたはロミオなのですか?)

(2) Romeo can,

Though heaven cannot: O Romeo, Romeo!
Who ever would have thought it? Romeo!
(3.2. 40-42)

(ロミオさんにはできるのです、神様にはできなくても。ああロミオさん、ロミオさんたら！そんな事を誰が考えつきましょう？ああロミオさんたら！)

上記の(1) ヴェローナにはモンタギュー、キャピュレットという相争う二名門があった。モンタギューの息子ロミオは、キャピュレット家の仮面舞踏会で、その家の娘ジュリエットを見てすぐに好きになる。しかしその後、二人はお互いに仇敵の間柄であることを知る。ロミオはその場所を去りがたく庭園に身をひそめる。ジュリエットもロミオ恋しさに眠られず、バルコニーに出てきて、下にロミオがいるとも知らずに、この台詞から思いを口に

しはじめる。

やがて十四歳の春を迎えようとするジュリエットにとって、恋しい人が敵の家の息子ロミオと知った切なさを表現するのに「なぜあなたはロミオなのですか？」という以上の言葉は思春期の真っ只中にあるジュリエットには持っていなかったであろう。そしてロミオが愛を誓おうとすると、ジュリエットがそれをおしとめる。この辺から始まる愛の対話は美しく、恋人同士の対話のお手本となるようなもので、ここでの“Romeo”の反復の使用は感情的なものになり、その効果が読者によく伝わってくる。

(2)の場面はジュリエットと乳母の対話の箇所であるが、引用の文は乳母の話である。ここの話は早く日が暮れて夫のロミオが来てくれたらと、その帰りを首を長くして待っているジュリエットは、従兄のティボルトがロミオの手によって亡くなったこと、そしてロミオがヴェローナの大公によって追放になったことを乳母から知らされて驚く。しかし、乳母は夜になったらこっそりロミオを、ジュリエットのところに連れてくることを約束する。

ここにも“Romeo”の反復の使用の例が多く見られる。まず“Romeo can”「ロミオには(ティボルトを殺すほどの悪意をもつことができる)」の意味であるが、乳母が言っていることをジュリエットは理解していない。“Who...it”?「そんなことを誰が考えたでしょう?」

これまで述べてきたことは、文体に強意や、余韻そして装飾的な意味を与える場合が多い。もちろんこの技巧はそれぞれこれを用いる作家の個性によってある程度によってある程度左右されるといい得る。そしてこれは修辞法の技巧の中でも、最も顕著な非常に重要なも

のであるということは言うまでもない。

Ⅲ

以上*Romeo and Juliet*の言葉や、修辞法の技巧から特に目立ったいくつかの特徴を考察した。シェイクスピアの言語や修辞学はかぎらない国語愛と、たくましい文学精神とにささえながら、変化し発展しつつシェイクスピアの文学の内容と表現形式に大きな影響を与えたのである。そして筆者はこの作品を通じてシェイクスピアの言語と修辞学への関心と興味、さらにシェイクスピアが言語、修辞学、そして論理学の技巧を如何に取り入れたかをわずかではあるが考察したものである。

参考資料

テキストは*Romeo and Juliet, the Arden Shakespeare Complete Works* (1988) より採った。日本語訳はほとんど研究社版の沢村寅次郎訳を使わせていただいた。

豊田昌倫他訳『英語文体論辞典』三省堂、2000年。
大場建治著『ロミオとジュリエット』研究社シェイクスピア選集、2007年。

池田拓郎著『英語文体論』研究社、1992年。

倉橋健著『シェイクスピア辞典』東京堂出版、1985年。

大塚高信著『シェイクスピアの文法』研究社、1985年。

東田千秋著『英文学の言語と文体』三省堂、1957年。

山本忠雄著『シェイクスピアの言語と表現』南雲堂、1967年。

岩崎宗治編注者『ロミオとジュリエット』大修館シェイクスピア双書、1988年。

市河三喜、嶺卓二注釈者『ROMEO AND JULIET』研究社、1984年。